

# 「心の時代」に、素晴らしい夢と感動を！

## 福島祥郎オリエンタルランド社長が講演



講演する福島祥郎社長

東京デイズニールゾートでは、「夢よ、ひらけ。」というキャッチフレーズで、25周年アニバーサリーを開催中（2008年4月15日〜2009年4月14日）。その超人気テーマパークを経営・運営するオリエンタルランドの福島祥郎代表取締役社長（兼）COOの特

別講演会が7月3日、多摩キャンパスで行われた。「価値観の多様化とテーマパーク経営について」をテーマにした講演会には、永井和之総長・学長ら大学関係者をはじめ、多くの学生が聴講にかけつけ、大教室はほぼ満席。学生の就職先希望企業の上位に常に名

を連ねる超人気企業のトップの講演とあって、関心の高さを示した。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆  
 福島氏は本学経済学部を昭和44年に卒業後、株式会社オリエンタルランドに入社、広報室長、常務営業本部長、専務運営本部長などを経て、平成17年6月から現職。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆  
 「カリフォルニアや香港など、世界にあるこのデイズニールランドと比べても、一番優れているのは東京です」

福島氏は講演の冒頭にこう断言した。その理由として、デイズニールランドが日本の会社であることを挙げた。具体的には①長期的視

点に立った経営②現場（ゲストとのコミュニケーション）を通じてのプログレス③チームワーク④職人気質、もてなしの心①の4点を指摘、「本来日本人が持つているDNAなのだと思う。この日本のノウハウに、アメリカのノウハウが重なり合って質の良いものを生み出すことができる」と述べた。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆  
 日本固有の価値と米デイズニールランドのノウハウが重なり、相乗的な効果を生み出しているというのだ。そして東京デイズニールゾートでは、「自由でみずみずしい発想を原動力に、素晴らしい夢と感動、人としての喜び、やすらぎを提供することを心がけている」と強調した。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆  
 オリエンタルランドのライブエンターテイメント市場規模は、1兆1405億円（2006年）で、そのうち約50%をテーマパークが占めている。福島氏は、

オリエンタルランドでは「顧客の喜びを自分たちの喜びにしている」という。

「仕事とは他者を通じて自分に結果が戻るもの」と指摘し、「たらいに張った水は手前にかき寄せても反対側へ流れていってしまう。向こう側へ流してやることによって、自分の側へ廻ってくるのがわかるだろう」と説明した。

◆ ◆ ◆ ◆ ◆  
 福島氏は「これからは、精神、感性、文化といったより内面的で、より人間の根源に近づく『心の時代』になる」と分析し、次のように解説する。

東京デイズニールランドが開園した1983年は、日本には、今のような技術はなく、人々は生活においても満足できるほどのたくさんの「モノ」を持っていなかった。そこで多くの人々は、豊かで華やかな「モノ」のあふれるアメリカの生活スタイルに憧れ、一生懸命

働いた。

それから25年が経った現在、私たちの生活は見違えるほど豊かになり、中国や東南アジア諸国から憧れを抱かれるまでに成長した。

こうした変化の中で、生活における物質的要求が満たされたとき、人々の要求は「モノ」ではなく、知や美へと向かった。

福島氏は、この「心の時代」におけるデイズニリーゾートの姿勢について、まず「和顔愛護」という言葉を挙げた。この言葉は、仏教用語で、「和やかな表情と親愛の情がこもった言葉遣い、親しみやすく暖かい

態度」を意味しているという。

次に、最も重要なものとして、「世界観の徹底」を挙げた。デイズニリーゾートという非日常の世界で、人々は、「モノ」ではなく「ストーリー」を買う。そして、ストーリーに共感して初めて「モノ」を買う。そのため、徹底的に矛盾なく際限がない世界をつくり上げることが重要なのだという。

最後に、福島氏は「今、オリエンタルランドは『守』から『破』を経て『離』のときにある」と強調。『守』とは、アメリカのデイズニリーランドから日本のデイズニリーランドをつくったこ

と。『破』とは、基本を破り、アメリカのデイズニリーランドからデイズニリーをつくったこと。そして『離』とは、まったく新たな試みを模索するということだと説明した。

その新たな試みに関連して、福島氏は質疑応答で、「今はまだコンセプトをつめている段階、今の足場（デイズニリーゾート）を固めた上で外へ目を向けて行きたい」と述べ、夢が膨らむ話で講演を締めくくった。

（学生記者 篠田有紀 法学部2年）

## 夏休みに最先端のテクノロジーを体感

### 中高生対象にサイエンスセミナー開く

中学、高校生を対象に最先端のテクノロジーを体感できる中央大学サイエンス

セミナーが8月21日、後楽園キャンパスで開かれた。実験コース6種類の中から

希望するコースを選び、事前にウェブエントリーする形で約60名が参加。1人で

参加した人も多く、サイエンスに対する中高生の関心の高さを示した。

セミナーは、昼前に3号館10階会議室で開会式を行ったあと、食堂に移動し、学食体験も兼ねて全員で昼食とともにした。

午後からは、コースに分かれて実験を体感。教授や大学院生の指導で、スピーカーや顕微鏡の作成、ペットボトルのリサイクル技術

や数理ゲームの必勝法などの実験を行った。

榎山和男教授（土木工学科）のコースでは、「3次元の都市空間を創りバーチャルリアリティーを体験しよう」と題した実験が行われた。参加者は大学院生に手伝ってもらいながら、CG（コンピュータグラフィック）を用いて様々な建物や木々を自分の思うように配置して都市空間を



特殊メガネをつけてバーチャルリアリティーを体感

作成。その映像をスクリーンに映し出し、特殊なメガネを通して見ると、目の前に自分の創った3D空間が「誕生」、その空間を歩く体験をした。スクリーン上部に取



プラズマ実験の説明をする大学院生ら

あがつていた。疑問点があると、中高生や保護者は、次々に大学院生に熱心に質問していた。実験終了後、参加した中高生全員

り付けられた6台のカメラがメガネの位置を把握し、その視点からの映像をメガネを通して見ているというのが、この仕掛け。記者も体験したが、歩いていて木々や建物の壁に当たったりそうになると体をよけてしまった。中高生らは不思議な面持ちでこのバーチャルリアリティーを体験していた。

情報通信工学科)のコースでは、「プラズマの火の玉でコインをピッカピカに」と題し、プラズマを用いて実験。ここでは汚れたコインをタンクに入れ、アークプラズマで作った青白い火の玉にさらすときれいになるという実験が行われた。理論は多少難しかったものの、タンクの中の火の玉を覗き込んでいた参加者からは「おお」という歓声か

に修了証書が授与された。その後は飲み物やケーキが振舞われ、各コースごと指導教授を中心に和やかに歓談。その中で、仲良く笑い合っていた神奈川の高校2年生と東京の高校1年生の

女子高生2人は、今日初めて知り合い実験を通して友達になったという。2人は「顕微鏡は難しくて結局作れなかったけれど、とても楽しかった」「顕微鏡は作れたが実際に見た生物はよ

くわからなかった」と話し、あらためてサイエンスに興味をもった様子だった。サイエンスセミナーは来年も開催する予定だ。(学生記者 小室靖明 理工学部3年)

## 会計士を目指す人のキャリアデザインについて 商ゼミ連主催で、OB2人が体験に基づいて講演

公認会計士合格を目指す学生を対象に、「会計士を目指す人のキャリアデザイン」をテーマにした講演会(商学部ゼミナル連合会主催)が7月1日、多摩キャンパス内で開かれた。

ついてあまり知識のない1、2年生を中心に約100人が参加、講演を熱心に聞き入った。

する有限新日本監査法人での仕事の内容を具体的に紹介しながら、公認会計士という仕事を簡潔に説明。自分自身が公認会計士を目指した理由については、

単に資格をとることを目標にするのではなく、自分の将来のキャリアデザインも含めたうえで資格を取得してほしい、との考えで、商学部ゼミ連が企画した講演会には、公認会計士を目指す学生や、まだ会計士に

はじめに登壇した横田昌彦さん(2004年商学部会計学科卒)は、現在勤務



横田昌彦さん



中村英敏さん

「給料」と「安定性」をあげるなど、現実的な話をユーモアを交えて講演した。横田さんは、公認会計士を目指すために、大学時代にすべき事は、「毎日、勉強！」と強調。「勉強を毎日続けるには辛くなる時もあるが、社会人になった後の自分を想像しながら、大学生活を過ごす事が重要」と熱く語った。

続いて登壇した中村英敏さん（2004年商学部会計学科卒）は、旧3次試験に合格し、新日本監査法人金融部勤務。現在は中央大学大学院商学研究科に在学し、財務経営学を学んでお

り、いずれは大学での研究職を目指している。

中村さんは、自らのキャリアに基づいて、具体的な例をあげながら講演。公認会計士を目指すに当たっては、資格をキャリアデザインにどう生かしたいのかを考える必要があると指摘。例えば①税理士、コンサル

ト業務②実家で公認会計士法人勤務④自分で会社を立ち上げる—などを念頭に入

れながら大学生活を送ることが重要、と強調した。大学時代で身につけておくべきことについては、「IT」と「英語」の二つを挙げ、

「この二つは、どの企業でも通用するからだと説明した。また大学では、管理能力を身につける為の一つの例として、飲み会の

幹事をやるのもいいとおもしろく語った。

そして中村さんは、公認会計士と弁護士との資格を比較。「弁護士は会社に勤めるのには向いていない。でも公認会計士は、金融機関

をはじめ会社に勤めやすい。明確なキャリアデザインを

考えていなくても、公認会計士をやりながら、見つけていくことも可能だ」と述べ、公認会計士という資格を強く後押しした。

最後に質疑応答を行い、約1時間半に及ぶ講演会は幕を閉じた。

（学生記者 梶原麗奈 法学部2年）

## 女子学生のための防犯講習会

### 「一番の護身は逃げること」

### 理工学部で

通りすがりに無差別に殺傷する残虐な事件が相次いでいるなか、不意に暴漢に襲われたとき、身を護るにはどうしたらいいか。防犯担当の警察官を講師にした「女子学生のための防犯講習会」が8月5日夕、後楽園キャンパスの理工学部3号館で開かれた。

理工学部学生生活課が企画した講習会には、女子学生はじめ女子職員ら27人が参加、「護身」に対する関心の高さをうかがわせた。

はじめに警視庁富坂署生活防犯課長の餅原明人警視が、警視庁管内で昨年1年間に発生した234件の性犯罪を参考に、犯罪から自分自身を護る心得について逐条的に説明。

鍵のかけ忘れに注意する。鍵はワンドアに2つ以上つける。帰宅時に窓を開けるときは、不審者がいないかをよく確認してから開ける。外出時は外に誰かいないか確認してからドアを開ける。自宅周辺に死角になるよう

なものは置かない。外を歩くときは隙をみせない。携帯電話をしたり、音楽を聴いて歩いたりしていると狙われやすい。万一、襲われたら周りの人の協力、助けを求め—ことなどに注意するよう強調した。

参加した女子学生たちは、真剣な表情で聞き入っていた。

続いては暴漢に襲われた時の護身術について、柔道師範の富坂署署員が具体的に指導。「一番の護身は



一撃をかわす術を反復練習する参加者

指導を受

抜けるワ

時にすり

つかれた

から抱き

ザ、後ろ

腕を払い

のけるワ

ザ、後ろ

て突き刺

してきた

腕を払い

のけるワ

ザ、後ろ

て突き刺

してきた

逃げることで。とにかく遠くに逃げるのが肝心です」と何度も声を大きく張り上げ、暴漢から第一撃を受けたいことの重要性を強調した。

そのうえでどうしようもなく逃げられないときは、「喉や溝落ちなどの弱いところを攻める。男だったら

股間を蹴るか、殴るか、蹴づかみにするかをしてください」と指導。参加者は一部から笑い声が漏れたものの、すぐに表情を引き締めなおしていた。

こんどは暴漢からの一撃をかわす術で、署員が「模範演技」したのを見習って参加者が二人一組になって

けた。

はじめはまごついていたら女子学生たちも繰り返しうちに「上達」、危機管

理に対する考えを深めた様子だった。最後に参加者は「一撃をかわしたら、立ち止まっていないで、すぐに

逃げることで」との防犯の心得を胸に刻み込み、講習会を終えた。

(編集室)

## 就活の全ノウハウを公開した就職徹底ガイド キャリアセンターのベテラン職員が共著で出版

「河合塾」の高校教員に對するアンケート調査(2007年実施)で、中央大学と明治大学が進路支援に熱心な大学として同率1位に選ばれた。その2大学で長年、学生の就職支援を行ってきた職員による就活本がこのほど発行された。

中央大学キャリアセンター  
ターキャリア支援課副課長の松村祐明さんが、明治大学の神川明彦さんと共著で出版した『就職徹底ガイド 納得の内定 就職ブランド大学 中央大学・明治大学 全ノウハウ公開』だ。

「いろいろな就活本が店

頭に並ぶ中で、大学のキャリアセンターという現場の相談員による考え方やスタンスが書かれた本は今まであまりなかったんです。大学としての共通のノウハウというより、自分が日ごろアドバイスしている就職活動のスタンスを中心に述べさせてもらいました」と

「企業研究」「エントリーシート」「面接対策」などと続き、最後に「内定」を手にするまでの実践的なノウハウが章ごとに示されている。「面接でつまづく例」など、58のコラムも読みごたえ十分。松村さんは「これ一冊で就職活動の流れが把握できます」と自信を持つ。

松村さん自身は、就職活動で早々に某人気企業から内定を得た。しかし、「倍率が高いから」「大きい会社だから」などの理由だけで、モチベーションが高くないまま働いていけるのだろうかという「内定ブルー」に



松村祐明さんと著書

襲われた。迷った結果、就職活動をやり直し、最終的に母校である本校の職員になった。

当時の就職活動では、「自己分析」は一般的ではなく、それを行う人もほとんどいなかったが、松村さんは自分の自己分析を進めたのだ。「私は、いろんな人と会えて、いろんな可能性を試せる仕事がしたいと思った」のが動機で大学職員に応募し、さらに「大学外の人と会える仕事をしたい」とキャリア

アセンターでの業務を希望した。

就職後3年で仕事をやめてしまう新卒者が3割を超えているといわれる。会社を辞める理由には、「イメージが違った」「考えてもいなかった仕事を与えられる」などのミスマッチが挙げられる。このミスマッチを防ぐためにも、十分な自己分析が必要だ。

「ミスマッチがあった時に、簡単に諦めてしまう人が増えています。自己分析

をすることで狭まりはしますが、「想定外」があるのは当たり前。若いうちはそれでいいと思います。理不尽なことを楽しめる、流されていく勇気があってもいいと思います。Try & errorは、裾野が広いキャリアをつくるために大切です」と

松村さんは強調する。

本書に書かれた就活ノウハウは、ステップをひとつづつこなしながら働くことへの「覚悟」を決めるプロセスである。「将来のために最終的にこの会社にしよう」と覚悟を決められる本でもある。学生だけでなく、

企業の人事担当者や就職アドバイザーからも評判が高い本書は、就職活動を終えた記者にも、あらためて自分自身と向き合うきっかけをくれた。

(学生記者 山崎綾香 II 法学部4年)

## ご当地検定「タマケン」 地元の高い関心

### 初の検定に若年層中心に1500人超す申し込み

「多摩が大好き」といえる人を育てるためのご当地検定「多摩・武蔵野検定」(以下タマケン)が、地元の人たちを中心に大きな関心を集めている。10月26日の第1回検定に1500人を超す申し込みがあった。

主催するのは、社団法人学術・文化・産業ネットワーク多摩で、「タマケン」は、自分が住んでいる地域・周辺の魅力を再発見し、他方、

知らない知識を得ることでもさらに地元に興味をもってもらうというコンセプトで企画された。実行委員長は中央大学大学院公共政策研究科委員長であり、総合政策学部教授である細野助博先生。

4月から申し込みの受付が始まった。「会社の新人研修で地元を知って仕事をしてもらいたいというねらいの企業からの団体受検申

し込みが目立ちます。地元ともに歩む企業姿勢が伝わりますね」と、ネットワーク多摩のチーフディレクター、藤井進さんは語る。

学歴、年齢、性別、国籍などの受検資格の制限はない。主催側は当初、定年後のシニア世代の受検者が中心になるだろうと予想していたが、実際は20、30歳代が多い、という。

検定では、自然、地形、

歴史、遺産、産業、文化など多摩地域全般にかかわることが出題される。藤井さんは「観光目当ての方が知識を身に付けるためというよりは、地元住民の知的な遊び感覚で受検してもらいたいです」と地域活性化の一助を目指す。

事務局では、『多摩・武蔵野検定公式テキスト』（ダイヤモンド社発行、定価2100円）を発刊するとともに、10月12日には「タマケン受検直前講座」を開催、検定日の26日には「タマケン直後のおさらい&答え合

わせ講座」を開き、今後、「タマケン」が地元に着実に根付いていくことを期待している。

多摩地域外からの関心も高く、事務局が取材を受けたメディアは約30回にも及ぶ。また、北は札幌、西は福岡からの受検者もいるほどだ。

今後は毎年秋に1回のペースで検定を実施する予定で、2級、1級とクラスを増やすことも検討中という。「大学入学で上京してきた学生がこの地域を好きになってもらうためにも学



「タマケン」のポスター

生たちにも受検してほしい。その結果、ずっと住み続けたいと思ってくれればうれしい」とディレクターの樋口広大さん。

はタマケンの子ども版も作り、おじいちゃん、おばあちゃんと一緒に検定会場に行けるようなものにした。家庭の団欒の話題にタマケンが挙がり、普段から地元

の自然や歴史などに目を向けて、互いに郷土愛を育てあっていければ」と夢を描いている。  
(学生記者 新部真子 2年 学部3年)

## モバイルバリユービジネスでシンポ開催 電子マネー・ポイントなどの新展開は

9月25日、駿河台記念館で「モバイルバリユービジネスの新展開」電子マネー・ポイント・仮想通貨の見方・考え方」というテーマで、「モバイルバリユーシンポジウム2008」(主催：中央大学戦略

が古典になるような21世紀になった。ケータイの発展は色々な国に社会現象を与えた。日本は質の面でかなりモバイル改革をした」などと講演。続いて基調講演に移った。

電子マネーについては「現金より安全で、現金より早く支払える」とし、企業ポイントについては1つの店の割引や優遇サービスを使うおうとするので、他の店には行かなくなるなどそれぞれ効用をあげた。

経営アカデミー/株式会社 NTTドコモ モバイル社会研究所)が開催された。永井和之総長・学長の開会挨拶のあと、NTTドコモモバイル社会研究所の石井威望所長が、オープニング・リマークスで「20世紀

誘い」というテーマで講演したビジネススクールの杉浦宣彦教授は、「モバイルバリユーとは、電子マネー・企業ポイント・仮想通貨の3つの機能がケータイに入り、それが相互交換し、完結していること」と説明。

他方、今後の課題については「モバイルはシステムに大きく依存している状態がないと成り立っていない。また利用者保護にも力を入れなければならない」と指摘した。



モバイルシンポのパネリストたち

続いて「ネットワーキングの経済と信頼」というテーマで講演した同研究所の遊橋裕泰主任研究員は、電子的価値のビジネスチャンスは、全く別の業界にある企業と手を組むことで、自分のものが付加価値を増やすことなど指摘し、「同じコミュニケーションや社会システムのものでは大きな価値は

生まれない」と強調した。講演では、ビデオ映像でケータイを使ってコンビニで買い物したり、飲み会で割り勘する人などが紹介された。後半は、「モバイルバリユーの可能性とネットワーク連結型社会システムの信頼性確保に向けての課題」と題して、ビジネススクールの山本秀

男教授、首都大学東京大学院社会学部研究科の水越康介准教授、政策研究大学院大学の安田洋祐助教授に、杉浦教授と遊橋氏が加わってパネルディスカッションを開いた。

このなかで、モバイルバリユーの影響について、杉浦教授は「決済コス

トが低下するという。欧米では、技術はあっても実際に導入するには至っていません」と紹介。またツールとしての可能性について水越准教授は、「今までにあった『困り込み』や『割引』はユーザーの呼びとめのためです。もうひとつ、『コミュニケーションの運営』をスムーズにするためのポイントの存在が出てきています」と指摘した。

また水越准教授が、今後の課題として「モバイルバリユーの利用によって個人情報知られてしまう不安」をあげたのに対し、杉浦教授は「個人情報把握することは企業にとつては大切なこと。顧客層への判断につながってくるこれらの情報を得たあと、どう処理・管理するかが問われます」と説明。日本発のモバイルバリユーを海外に広げることの可能性について山本教授は、「地域・地方の文化や規制の問題を見ていく必要がある」などと指摘した。

最後に遊橋氏が、「価値観の多様化をビジネスモデルで支えることは、信頼によって形成されていることを私たちは改めて意識する必要があります」と締めくくった。

戦略経営アカデミーは、中央大学ビジネススクールのMBAカリキュラムを活かし、教育研究活動の成果を社会に還元するのを目的に今年4月開校した。

(学生記者 池田園子 法学部4年 / 竹下泰穂 経済学部4年)

## 「Hakumonちゅうおう」を常設展示

### 八王子学園都市センターのコーナーに

八王子地域にある大学の学生で組織する「八王子学生委員会」の協力で、8月6日から、JR八王子駅近くにある八王子市学園都市センター(八王子スクエア

ビル11階の情報コーナーに、『Hakumonちゅうおう』が常設展示し写真された。情報コーナーには、八王子地域23大学・短大・高専の学校案内パンフレットな

どが置かれており、大学から市民への情報発信スペースとなっている。

『Hakumonちゅうおう』は多摩都市モノレールの協力で、夏季号を主要駅





「Hakumon ちゅうおう」を展示・配布

構内（多摩センター駅、高幡不動駅、立川北駅、立川南駅、玉川上水駅）の目に触れる場所に置かせていただき、乗降客に自由に手にとって、持っていたのだが、八王子市内に設置されるのは初めて。今後も毎号を展示し、市民に自由に持たせていっていただくことにしている。

八王子市にある中央大学

は、八王子市民との交流の機会をできるだけ増やそうとしている。これをきっかけに、八王子市民の方々にも『Hakumon ちゅうおう』を読んでもらいたいので、中央大学をもっと知っていただき、大学と地域市民との交流をより深めていけたらと願っている。

（学生記者 上田雄太 文  
学部3年）



